

◆【海員随想】船員の出身地 海員OB 及川帆彦

近頃の船舶や船員のことは、よく分からないところもあるが、わたしが船員だった当時（1985年以前）は、日本船の乗組員は全員日本人で、1隻あたりの乗組員の数も多かった。そしてその乗組員は全国各地からの寄り集まりであった。北は北海道から南は沖縄まで、40年近い船員生活で、わたしはほとんどの都道府県の出身の人と乗り合わせた。栃木、群馬、長野、岐阜など、海のない県の人ともよく乗り合わせた。海から遠く離れているところだけに、海や船に対するあこがれや興味が強かったらしく、それが船員になる動機になっているようであった。しかし何と言っても、新潟、富山、石川、福井など、北陸出身の人と乗り合わせる事が多かった。中には兄弟や従兄弟や、あるいは叔父と甥が同じ船に乗っていることもあった。父親も祖父も船員だったという人も珍しくなかったし、福井県の確か三国だったと思うが、小学校の時の同級生が全員船員だと言う人もいた。

そうした人たちと接したり話を聞いたりしていると、船員になる人が比較的少ない東北出身の私など、間違っただけで船員になったような気がしたものである。船員になるのが既定だった彼らに対して、私などいわば飛び入りのような感じであった。大体、船員の出身地は西高東低とでもいうか、西の方が多かった。瀬戸内に商船学校が、広島、大島、弓削と3つもあったのに、北海道と東北にはひとつもなかったということでも分かる。東京、名古屋、大阪など、大都会の出身者とも乗り合わせたか、人口の割にしては少なかった。それに大都会の人は途中で辞めていく事が多かった。仕事ならいくらでもあるのだから、それも無理からぬことに思われた。

全国各地からの寄り集まりの乗組員であるから、それぞれの出身地である郷里の話をいろいろ聞くことができた。雪国なら雪下ろしや雪囲いの話。海沿いなら魚だけでなく、サザエやアワビをとる話。山村なら山菜やキノコ狩り、植林の話など。それに風習や行事や祭りの話などもいろいろ聞かされたものである。外国航路をやっているながら、国内各地のことに詳しくなるという、矛盾したような経験をするのはいつものことであった。

面白いのは、自分の郷里のことをよく言う人、いわゆるお国自慢をする人が多いことであった。自分の所でとれる米は、日本一うまいのだとか、おれのところのミカン最高だとかいった話である。温泉が多いとか、景色がいいと言うのもおれば、偉い政治家の出身地だと自慢する人もいた。中には日本では自分の郷里が一番いい所で他は皆駄目だ、みたいな言い方をする人もいた。だから自分の郷里のことを悪く言われようものなら、怒り出すし、口論になることもしばしばだった。

長年船員をやっている、お国訛りというのは抜けないもので、初めて乗り合わせた人でも、その話す言葉を聞いていると、この人は関西だ、あるいは関東だ、九州だ、と大体分かるものである。鹿児島県出身の人が2人、同じ船に乗っていたことがある。いわゆる「くに者」であったが、その「くに者」同士が鹿児島弁で話しているのを聞いていたことがある。が、何を言っているのかまるで分からなかった。こういう日本語もあるのかと奇異な感じを抱いたものである。

種子島出身の若いセーラーと乗り合わせたことがある。わたしはコーターマスターであったが、ある時とぼけたふりをして「種子島というのは日本領なのかな。ポルトガル領ではなかったかな」と言った。すると、そのセーラーの顔色が変わった。「何を言ってるんですか。日本領に決まっているじゃないですか。学校で地理の時に習わなかったんですか？」

「ああそうか。これは失敬。種子島にポルトガル人が初めて鉄砲を持ってきたのだったな」

「そうですよ。だから種子島は日本の近代文化の発祥の地ですよ。コーターマスターは東北でしょう？ 東北なんか文化果てるところじゃないですか」わたしは黙ってしまった。

「海員だより」